

第 25 回人文学・社会科学特別委員会における主な御意見

(研究基盤について)

- 人文学・社会科学にとって研究基盤とは、資料や資源、そしてその整備そのものである。自然科学では、大型分析機器・中型分析機器、それらの分析機器の維持管理を各大学が個別にやるのは困難であり非効率的なので、共同利用機関が大型機器を整備して、それを大学の研究者に提供するという考え方だと思う。人文系は、文化資料、文字資料、民俗資料などが大型機器に相当するものになるが、まだ整備が非常に不十分である。最も不十分なのは、日本各地に膨大な地域の資料が眠っているにも関わらず、それが未開発の段階である。資料が開発されていたとしてもネットワークでつながっていない。そこが問題で、それを改善するセンターのような役割を担うのが共共拠点であり、大学共同利用機関である。
- 人文学・社会科学内でも、グローバル・ローカルな指向性があるものと研究の方向性は多様であり、そのためデータの種類にも違いがあるが、量的なデータを集めていくか、質的なデータを集めるか、といった分け方をすると、整理しやすいのではないか。
- OCR で現代語訳や英訳までできるようになると、OCR は国際的で重要な役割を果たしうるが、その前提となるデジタル基盤が足りていない。
- 自然科学だと、一度大きな機械を買ったら基盤整備ができて、その機械をどれだけ人が使ったかということになると思うが、人文系の場合はデータをずっと増やしていかなくてはいけないため、ある程度専門知識のある研究者がその基盤を整備していき、他の研究者が使いやすいように出していくが、マンパワーが多く必要となり、若手の時間を奪うことになっている。しかし、その基盤整備への貢献が若手研究者の成果として評価されていない。
- 基盤を整理していくためには、専門性を持った人材が必要であり、若手にすべて担わせていいかという問題はあるが、その点は設備を入れるだけではなくテクニシャンも必要という自然科学の問題とパラレルではないか
- 人文系ではデータをつくるのが研究基盤であるという話があったが、その場合に研究基盤と呼んでいるものは、実際にはほぼ情報基盤であると思われる。情報基盤をつくる時に、異分野融合研究として作成する、人文学・社会科学の中だけで作成するという選択肢があると思うが、AI などが入ってきたときに、人文学・社会科学だけで最先端の科学に追いつけるのかということころは、心配である。そのため、研究基盤そのものを作る際に、情報系が人社系を手伝うという形なのか、一緒に新しいものをつくり上げていこうという形にするのか、考える必要があり、そこが人社系の研究基盤の特徴である。

- 共通基盤では、共同でいろんなものが利用できるというだけではなく、政府統計を二次利用する際にクリーニングしたデータを共有することで作業の効率化を図るなど、更新されたデータが蓄積されていくような仕組みになるとよいのではないか。

(共同利用・共同研究体制について)

- 人文系の共同利用機関というのは、データなどの基礎的な研究基盤をどれだけ持っているかということが一番大きな機能になっているというふうに理解をしている。そのため、自然科学研究機構の全体のオペレーションに関わるという例に寄せるのであれば、機械ではなくてデータ基盤を研究で使うときにどのような使い方が可能かなどのフォローアップをしていくといった、人文系の共同利用機関なりのオペレーションの在り方というのはあるのではないか。
- 人文・社会科学系の共同利用・共同研究に関わる機関で、重要なのはデータ・資料というものだと思う。基本となるデータで、既存のものであれば古文書とかそういうものもあると思うが、最近 AI とかが進んできて、新しく使えるようになったデータとか資料も、実はどんどん増えてきているような状況なだと思われる。AI によって、手法のアクセシビリティも相当下がってきている分野もあることから、研究の仕方実実は変わってきていると思われる。そうした中において、今の研究の仕方を含めて、そういうところもしっかり頭に入れておきながら、共同利用・共同研究機関の在り方というのも並行して議論をすべきである。

(異分野融合研究について)

- 共通の課題・事象に対する異分野融合研究は、課題設計において、スケールが大きいものにした場合、それぞれの分野とどのように協働していくかが漠然としたものになる可能性があり、またスケールが小さいものにした場合、一部の人のみの関与となる可能性があるという課題がある。課題設計の大きさを考えることが重要になるが、それをうまくフォローできると、実現できる可能性が高まるのではないか。
- 異分野融合の研究が求められていることから積極的に関与しても、学界全体が意識を高めるようなことをしない限り、研究成果が身内の学界に受け入れてもらえず、評価がされないという結果になってしまうのではないか。
- 他の学問領域の知見や方法論を活用する研究は、異分野融合とは言わないのではないか。どちらかがもう一方を利用するような形や、基本方針が違いすぎてけんかになるのではないか。また、ある分野の人がその分野から特に出ることなしに、知識だけを取り入れてやる、あるいはアドバイザーとして呼んできてやる、という形になりがちだと思う。

- 他の学問領域の知見や方法論を活用する研究は、個別の連携であり、異分野融合研究の中でもハードルが高くない。
- 特定の課題とか事象に関して幾つかの分野が融合的にアプローチする異分野融合研究に関わっている自然科学の研究者は、哲学などの人文学・社会科学の必要性を理解し関心があるが、人文学・社会科学の研究者がそのように自分の専門分野に関心を持たれていることをよく知らない。そのような異分野融合研究の分野があることを、外部へ可視化するだけでなく、その研究に関わる可能性・関わるポテンシャルを持っている人文学・社会科学の研究者への可視化していくことが必要である。
- 異分野融合領域、共同研究は、ダブルディグリーや、あるいはポスドクとなって武者修行で別の研究室・研究所に行くとかいうようなことがあればよいが、個人レベルだと融合はなかなか進まないということがある。科研費の学術変革領域研究で、様々な専門の研究者が計画班とか公募班というかたちで研究を一緒に進めていくことや、JST/RISTEX の社会技術研究開発事業などで、1つの領域に様々な専門性を持つグループが参画して、合宿なども行いながら研究を進めていくといった、出会いが効果的であったと思う。そのため積極的に研究費の中に人社と自然科学の研究者が出会う仕組みを作ることや、組織を超えた連携を促すファンディングがあると、新しい知の創出につながるのではないか。
- 卓越した人は、いきなり異分野の領域で業績を出すという人もいると思われるが、多くの若手や普通の研究者は、自分の専門分野があり、その専門分野での業績でキャリアでも評価されると思われる。そうした中において、新しい異分野に触れることで、アイデアあるいは手法などを学んで、それを自分の専門分野に持ち込んでいくという形が、多くの人たちは一般的な姿だと思われる。今の学術の評価の仕方として、異分野の業績をどこで評価するのだろうかという不安感があると思われるため、何か足場がないとなかなか難しいと思う。
- 法学は、何かの社会目的を実現のため研究が、実際に制度としてどうやって落とし込むという段階になってくると必要になるものであるが、異分野融合研究に関与することが限られてきた。理由としては、実務者を育てることが要求されており、そこで疲弊してしまっていることと、法学が実は自分たちのやっていることの最終的な実現に関係しているということを知らず、しかも誰にアプローチすればいいかというのが分からないということが考えられる。URAなどの人と人をつなげる窓口のようなものがないと、法学がせっかく持っている潜在能力というものを活用する道が狭まってしまう。また、異分野融合研究で得た成果を出す先がないことや、自分の専門分野に研究成果を出したとしても評価してもらえないという問題があることから、テニユアポストの獲得のために特殊な研究成果を出すこと要件化するなど、強制的なインセンティブシステムを作ること考えられるのではないか。

- 学際領域展開ハブプログラム（学際ハブ）について、認知科学やロボティクスなど哲学が他分野をつなげられるなど、コアになりうる分野はあるものの人文学・社会科学の中核機関が出ていないことから、先端的な学際領域を人がどのように先導できるのか、というのが大きな課題ではないか。
- 学際ハブに採択されたものを見ると、イノベーションの創出にかなった課題になっている。学際ハブのようなプログラムに応募する際は、人文学・社会科学は短期的なイノベーションを起こそうとするのではなく、ウェルビーイングを目指す課題になるが、研究プロジェクトとして落とし込むことが難しく、短期的な成果を出すことも難しいため、応募や採択されることが難しくなっていると思われる。研究支援の形そのもの、競争的な資金の募集の仕方そのものを、考え直す必要があるのではないか。また、応募側もプロジェクトとしての性格を考え、長期性だとか社会的インパクトをどのような観点で評価すべきか、ということを示していき、個々のプログラムの中にもうまく埋め込んでいくという、努力が必要である。
- 人文学・社会科学のためのプロジェクトを別枠で作りやってきたが、それだけでやるのはかなり無理があるため、既存の枠組み（学際ハブ・学術変革領域など）に人文学・社会科学ベースのものが様々な形で入っていくようにするためには、どのような環境整備が必要なのかを考えていくことが必要である。
- 課題解決という観点からアウトプットをみると、社会科学のほうがより具体的で、人文学のほうが漢方薬的な少し遠いところから話すことが多いと思われる。
- 人文学・社会科学の内部での異分野融合が大事であることは、折に触れて何回か出てきたが、人文学・社会科学の違いをうまく生かして、どうつないでいくかということの議論もする必要がある。